

ふく だ かず や  
福 田 一 也

学位の種類 博士(国際文化)

学位記番号 国博第45号

学位授与年月日 平成17年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科(博士課程後期3年の課程)  
国際地域文化論専攻

学位論文題目 道家思想の形成過程  
— 新出土資料を中心として —

論文審査委員 (主査)  
教授 浅野裕一 教授 石川秀巳  
助教授 勝山 稔

## 論文内容の要旨

### 一 本研究の目的

近年における新出土資料の発見は、従来の中国古代思想史の枠組みを大きく変えようとしている。新出土資料の出現によって通説が次々と覆されるとともに、これまで詳らかでなかった事柄が次第に明らかとなり、思想史の空白が徐々に埋まりつつあるからである。

古代史研究は、常に資料不足という問題を抱えている。中国古代においては、秦の焚書の影響もあり、とりわけ先秦の資料が少ない。また辛うじて亡佚を免れた書物も、伝承通り先秦の文献と認められることは少なく、戦国末や漢初までその成書時期が引き下げられるか、或いはより後世の偽書として扱われることも少なくなかった。すなわち従来の先秦思想史研究は、極めて限られた資料的制約の下での研究を余儀なくされてきたわけである。このような状況の下に、郭店楚墓竹簡(以下、郭店楚簡と略称)や上海博物館蔵戦国楚竹書(以下、上博簡と略称)など、戦国期の原資料が出現した意義は誠に大きいと言わねばならない。

新出土資料はその資料的性格から、伝世文献と重なる内容を持つ書物と、伝世文献には全く見えない古佚書との二つに大別できる。前者は、伝世文献の由来の古さを証明するとともに、より原著

に近い姿を我々に示してくれる。また後者は、伝世文献の隙間を埋める貴重な資料であり、これにより詳細、且つ体系的な思想史の把握が可能となりつつある。先秦思想史研究は、新出土資料の発見によって、今まさに再構築を迫られているといえよう。

道家研究も例外ではない。道家思想史を論ずる際に中心となるのは、道家の開祖とされる老子である。その著書である『老子』の成立に関しては、春秋末説から漢初説に至るまで様々な説が提起されてきているが、中でも戦国中期の孟子以降の成立とする見方が有力視されてきた。しかし、一九九三年に郭店一号墓から発見された郭店楚簡『老子』(以下、郭店『老子』と略称)は、かかる通説に大きな衝撃を与えることとなる。郭店『老子』は戦国中期以前のテキストであり、孟子以前に『老子』の原著が成立していたことはほぼ確実となった。さらに郭店『老子』と今本『老子』とを対照すると、そこには思想上極めて重要な差違も看取される。郭店『老子』の出現は、まさに道家思想の中心部を大きく揺さぶったといえよう。

新出土資料はまた、これまで知り得なかった多様な道家思想の実態を我々に示してくれてもいる。従来の道家研究は、『老子』と『莊子』を中心に進められてきた。道家思想を、別名、老莊思想と呼ぶ所以である。『漢書』芸文志・諸子略・道家類に列挙されている道家の著作は、その大半が既に亡んで伝わらない。辛うじて亡佚を免れた書物も、多くは資料的信憑性に問題を抱え、正面から取り上げられることは少なかった。比較的信頼の置ける『老子』や『莊子』を中心に道家思想が論じられてきたことも、かかる事情よりすれば無理のないことであったといえる。しかしながら、馬王堆帛書『老子』乙本卷前古佚書や郭店楚簡『太一生水』などの道家系新資料の発見は、これまで知られることのなかった新しいタイプの道家思想の存在を明らかにした。また、後世の偽書とされてきた『文子』や『鶡冠子』等の伝存文献は、新出土資料の発見によって復権を果たしつつある。道家研究は、これらの資料を加えることで、より多面的な考察が可能となってきているのである。

本研究はこのような状況を受け、伝世文献はもとより新出土文献をも最大限に活用し、両者の突き合わせを通じて道家思想の形成過程を明らかにせんと試みるものである。

## 二 各章の概要

### 【第一章：『老子』の思想】

第一章では、新出資料である郭店『老子』を中心に、『老子』の思想を再検討した。『老子』の思想は万物の始元・根源としての「道」を中心として展開する。「道」は『詩経』や『書経』に見えるような有意志の人格神たる上帝とは対照的に、無意志で物質的な存在であり、『老子』はかかる「道」を上帝に上位に位置づける。一方で『老子』は天道をも重視するが、これもまた「道」とよく似た性格を備えている。今本では「道」に関して説かれていた部分が、郭店『老子』では天道に関して述べられたものとなっている箇所もあり、かかる事実はより一層両者の関連性を窺わせる。

すなわち、『老子』の「道」は天道を念頭において考案されたものと考えられるのである。

さらに重要な点は、仁義に対する位置づけが郭店『老子』では異なっていたことである。帛書を含む今本系のテキストでは、仁義は「道」に反するものとして激しく批判されている。これは儒家批判、中でも仁義を顕彰した孟子への批判と見做され、本書は儒家への対抗心から孟子以後に成立したと考えられてきた。ところが、より古いテキストである郭店『老子』には、仁義に対する明確な批判は見えず、むしろ仁義は「道」の土台の上に成立するものとして、その価値は認められていた。『老子』本来の思想は、儒家思想と正面から対立する思想ではなかったと考えられるのである。これにより、儒家思想に対するアンチテーゼとして『老子』の思想が出現したとする旧来の見方は成立し得なくなった。と同時に、『老子』の成立は遅くとも『孟子』以前の戦国前期、早ければ伝承通り春秋末期にまで遡る可能性も出てきたのである。

### 【第二章：『文子』の思想】

第二章では、『老子』と密接な関係にある『文子』の思想に焦点を当て、特に新出資料である竹簡『文子』を中心に考察した。

『文子』は万物の根源としての『老子』の「道」を思想的根幹に据えており、『老子』と極めて密接な関わりを持つ。ところが『文子』は、今本系の『老子』では否定されている学問をも重視する。一方では『老子』に従い、他方では『老子』と決別したように見えるが、『文子』の学問論の内容を仔細に検討してみると、それは決して『老子』に反するものではなく、むしろ『老子』を補完しようとする試みの中から登場してきたものであることがわかる。

また、『文子』は仁義礼の効用をも積極的に認めている。仁義礼を排斥する今本系の『老子』をベースに考えると、ここでも『文子』は『老子』と袂を分かったかに見えるが、「道」のもとに仁義礼の価値を認める郭店系『老子』をベースに考えれば、かかる現象も決して無理なく理解できる。『文子』の思想は郭店系『老子』の思想に基づき、それを発展させたものと考えられるのである。

### 【第三章：『太一生水』の思想】

第三章では、郭店『老子』とともに出土した道家系出土文献の一つであり、その独特な宇宙生成論によって注目を集めている郭店楚簡『太一生水』について考察した。

『太一生水』は、「太一」→「水」→「天」→「地」→「神明」→「陰陽」→「四時」→「滄熱」→「溼燥」→「歳」、という宇宙生成論を展開する。万物の始元たる「太一」は、天地よりも上位に位置づけられており、且つ万物を統括する根源としての役割をも担っている。また「太一」は、上帝のような有意志の人格神ではなく、無意志の物質的な存在である。以上の点は『老子』の「道」と近い性格を示すが、「太一」には『老子』の「道」のように統治の規範としての性格は与えられ

ていない。

また、『太一生水』において「水」は「太一」に次ぐ高い地位を得ているが、それは『老子』が説くように柔弱性を有するためではなく、「太一」の運搬者としての役割を担っているためであった。「太一」は「水」に搭載されることで世界に隅々に行き渡り、これにより「太一」は単に根源としての役割を担うだけでなく、万物にとって非常に身近な存在ともなったのである。

さらに『太一生水』の宇宙生成論は、「歳」（一年）の形成までを記していることからわかるように、一年というサイクルが如何にして成立したかを説明する点に最大の主眼がある。このような『太一生水』の宇宙生成論は、『老子』よりもむしろ天道を重視する『十六経』などの黄帝書の側と近似性を示している。

以上の諸点を考慮すると、『太一生水』と『老子』の間に直接の影響関係を認めることはできず、両者は一応別々の文献として成立した可能性が高い。だが、そこには万物の始元・根源を設定するなどの思想的共通部分もあり、郭店『老子』丙本と『太一生水』の如く同冊の竹簡に書写されることもあった。それは『老子』とともに『太一生水』までもが老聃の著作と見做される事態を生じ、老聃が「太一」を説いたとする『荘子』天下篇の認識もこうして形成された。

#### 【第四章：『荘子』の思想】

第四章では『荘子』に焦点を当て、内篇を中心とする荘子の思想と、外・雑篇に見える『荘子』後学の思想を考察した。

荘子も他の道家と同じく、万物の始元や根源について思索したが、そこで得た結論とは、人間の思索を通してそれらを求めることは不可能であるということであった。これは万物の始元・根源を設定する『老子』や『太一生水』とは全く異なる見解である。また荘子は、人間の苦悩は事物に価値判断を行うことにより生ずると喝破し、価値判断を放棄して万物を等価とみる著名な万物斉同の思想（斉同論）を提唱した。彼が説く養生論や統治論もみなこれを基礎として展開している。そしてこの斉同論は、弁者として名高い荘子の論敵、恵施との交流を通して形成されたものであった。恵施は極大・極小の論理を用いて世間の常識の転覆をはかったが、荘子はその論理をもちいて万物の差異を無に帰せしめ、万物斉同の境地に到達したのである。

以上の思想を継承・発展させたのが『荘子』後学であるが、彼らの手になるとされる外・雑篇では、荘子には希薄であった政治的関心が急激に高まりをみせ、また『老子』へ急接近するという新傾向も生じている。これは当時盛んに統治論を展開していた儒家、中でも子思学派への対抗心が引き起こした現象と考えられる。荘子にも若干ながら統治論は存在し、『荘子』後学の著作と考えられる外・雑篇には、それを発展させたと見られる部分もある。だが、もともと政治的関心が希薄な荘子の思想を統治論へ応用するのは困難な面もあり、その不足を『荘子』後学は豊富な政治論を有

する『老子』によって補完せんと試みた。『莊子』後学が『老子』に接近した理由もそこにある。ただし郭店系『老子』は、仁義礼については条件付きで容認するという、儒家思想と融和的な側面をも備えていた。そこで彼らは『老子』の文章に巧みな改竄を施して反儒家的な内容に作り替え、『莊子』得意のパロディ的な手法で儒家批判を展開したのである。かかる運動の影響は元の『老子』テキストにも及び、ここに極めて反儒家的な帛書系『老子』テキストが誕生する。そして『莊子』後学の活動とともに帛書系『老子』は流布し、瞬く間に多くの読者を獲得して、戦国最末期から漢初には、郭店系『老子』を押しつけて主流の座へとのぼりつめたのである。

#### 【第五章：『十六経』の思想】

第五章では、長沙馬王堆三号漢墓から発見され、黄帝書との関連が示唆されている『十六経』について考察した。

『十六経』では、最上位に有意志の人格神たる上帝を据え、その意志を体現するものとしての天道を重視する。中でも、日月や四時の周期運動が示す刑徳は『十六経』の作者が最も注目したものであった。刑とは『十六経』の中では主に他国に対する軍事行動の発動を指し、一方の徳とは対外戦争を控え雌伏することを指す。日（徳）と月（刑）、四時における春夏（徳）と秋冬（刑）は相反する性質を備えながら絶え間なく反復運動を繰り返し、それとともに天の示す刑と徳の時宜も刻々と移り変わる。それを的確に読み取り天時に合致した行動をとることが『十六経』の中心課題であった。その意味では『十六経』を一種の軍事思想と捉えることも可能である。

『老子』では無意志の「道」を最上とした上で、その「道」のあり方を体現したものとしての天道を説く。一方の『十六経』は、有意志の人格神的な上帝を最上とし、その意志を現すものとして天道を重視する。このような違いは厳然として存在するものの、天道を強調するという点では一致し、また『十六経』には「道」に関する記述も見えており、両者は「黄老の術」として結合するだけの要素を十分に胚胎してもいた。

#### 【第六章：『鶡冠子』の思想】

第六章では、黄帝書との関連が注目され、古書としての復権を果たしつつある『鶡冠子』について考察した。『鶡冠子』中には様々な思想が混在し、非常に雑駁な思想であるとの印象を受ける。しかしながら、『鶡冠子』は天を周期運動対と捉え、天道を規範とした生殺（＝刑徳）を説いており、『経法』や『十六経』と酷似する文章が見えることから、黄帝書の天道思想の影響を最も強く受けているといえる。『鶡冠子』は天道を中心にした「天曲」・「日術」という郡県制を説いており、また天の四時に仁義等の人倫徳目を配置するという思考も見える。さらに、天の四時や地の五行に倣った軍隊の布陣を説いてもおり、これらはいずれも天道を中心とする黄帝書の思想の発展

形とみることができる。だが、その一方で『鶡冠子』では天殃に関する記述は影を潜めており、天の強制力が黄帝書に比べてかなり弱まっている。また聖人は天や地にも働きかけが可能であり、天地を統御するのは聖人であると述べている部分さえある。すなわち、『鶡冠子』においては人為の可能性は飛躍的に高まっており、黄帝書の思想を強く受けつつも、一方において『鶡冠子』独自の展開もみせているのである。

### 【第七章：『淮南子』と道家思想】

第七章では、道家思想の集大成とも評される『淮南子』を中心に、漢初における道家思想の展開について考察した。

『淮南子』は多種多様な思想を包摂しているが、その中心にあるのは『老子』と『荘子』の思想である。これは『淮南子』の編纂に『荘子』後学が中心的役割を果たしたためと考えられる。ただし、『老子』と『荘子』の思想は、全く相容れない側面をも内包していた。『老子』は万物の始元・根源としての「道」を設定する。一方の『荘子』は、万物の始元・根源は通常の思索を通しては把握不可能であるとする。かかる点において、両者の見解は全く相反するものであったのである。しかしながら、『淮南子』では、『荘子』と全く同じ文章を引用しながらも、それに全く異なる解釈を施し、『老子』の思想に合わせるかたちで両者を融合させている。

次に、『淮南子』に見える仁義説について考察したところ、『淮南子』には①道徳と仁義を対置させて仁義を否定する帛書系『老子』に淵源する思考、②道徳のもとに仁義を包摂して仁義を肯定する郭店系『老子』に淵源する思考、③単独で仁義を統治の要諦とする儒家（特に子思学派）に淵源する思考、以上の三つの仁義説が混在していた。②③のように仁義を肯定する立場がある一方で、①のように極めて否定的な論調もあり、その位置づけが一定していない。だが③のように生粋の儒家説も取り込む姿勢がみえる点では、儒家思想に歩み寄りをみせたと評すことができよう。ただし、『淮南子』に採録されている個々の道家思想を比較すると、反儒家的な帛書系『老子』の流れを汲む①の思考が圧倒的に多く、諸家の総合を試みる『淮南子』の編集方針とは裏腹に、漢初における道家思想の大勢は既に反儒家的な帛書系『老子』の思考へと移行していたのである。

### 三 結論

各章の考察に基づき、道家思想における二つの主要な流れを想定し、道家思想の形成過程について以下のように論じた。

先ず想定されるのは、『老子』の思想を中心とする流れである。『老子』は天道を重視したが、さらにその根本に「道」を設定してこれを尊んだ。「道」は万物の始元・根源であり、また仁義礼など人倫秩序の大元であるともされた。かかる路線を忠実に受け継ぎ、発展させたのが『文子』であ

る。

『文子』は『老子』の「道」を中軸に据えると同時に、『老子』が説くことのなかった「道」の獲得法にも言及した。また、仁義礼等の人倫秩序は「道」を根幹に成立するとする『老子』の思想構造を継承し、より前面に仁義礼の効用を説くに至ってもいる。少なくともこの時点まで、道家思想は儒家思想とも決して相容れない思想ではなかったといえよう。しかしながら、この路線に大きな変化をもたらしたのが『莊子』である。

『莊子』内篇を中心とする莊子本来の思想中には、『老子』の影響はほとんど看取されない。万物の始元・根源を不可知のものとする莊子の思考は、むしろ『老子』の「道」と相対立する要素さえ内包している。莊子の思想の中核は、万物の区別や差別を停止し万物は全て斉しいとする万物斉同の思想であり、莊子が展開する養生論や統治論も全てこれに基づいている。莊子は弁者の雄として名高い恵施と親交があり、恵施は莊子のよき論敵でもあった。恵施は極大と極小の論理を用いて常識の転覆をはかったが、莊子も同様の操作を行い、万物の区別や差別を無に帰せしめる。すなわち、莊子が説く万物斉同の思想は、恵施との論争の中で生まれたものであった。

莊子には弟子が存在し、ある程度まとまった活動を行っていたようである。かかる『莊子』後学の思想は『莊子』外・雜篇を中心に見えており、もちろん莊子の思想をそのまま継承したとみられる部分も多く存在する。しかしながら一方で『莊子』後学の中には、『老子』に急激に接近するという新たな展開も見せる。

折しも儒家は仁義、或いは礼楽を掲げ、盛んに天下統治の方策を議論していた。ところが、莊子本来の思想にはそれに見合うだけの統治論を備えていない。そこで『莊子』後学は、豊富な統治論を有する『老子』の思想を急遽導入し、莊子の思想の補完を試みたのである。ただし、「道」を根本とするという条件付きで仁義の効用を容認する『老子』の仁義説は、そのままではあまり有効な儒家批判とはならない。そこで『莊子』後学は『老子』の文章に手を加え、極めて反儒家的な文章へと改変し、儒家批判を展開することとなる。こうして極めて反儒家的な『老子』テキストが誕生し、以後『莊子』後学の活動とともに広汎に流布していくこととなった。

『莊子』後学は、漢初に編纂された『淮南子』にも多大な影響を及ぼす。『淮南子』は戦国末以来の思想の総合化の気風を受け、多種多様な思想をその中に包摂するが、その中心に据えられたのが『老子』と『莊子』の思想であった。『老子』とともに『莊子』がその一翼を担うに至ったのは、『莊子』後学が『淮南子』編纂の中枢に関わっていたためと思われる。だが先にも述べたように、両者の思想は、別々の背景の下で成立したものであり、思想的な継承関係はほとんど看取されず、特に万物の始元・根源に対する認識には大きな隔たりがあった。かかる問題を『淮南子』の編纂者は『老子』に合わせるかたちで調整し、ここに『老子』と『莊子』は一応の結合をみるに至る。なお、多様な思想を容認せんとする『淮南子』の編集方針とは逆行するが、『淮南子』中には儒家が

唱道する仁義を排撃する論説が多く採用されている。すなわち、これはかかる論説の母体となる反儒家的な帛書系『老子』、及び『莊子』外・雜篇の思考が当時の道家の主流をなしていたことを示している。

従来、道家思想は儒家思想に対抗して登場し、その後、次第に儒家思想に歩み寄りをみせていったと考えられてきた。確かに、『淮南子』では儒家説も多く採用されており、儒家に歩み寄りをみせた側面もある。しかし、以上の流れを踏まえるならば、『老子』を中心とする道家思想は、始めは儒家思想とそれほど相容れない思想ではなかったものの、時代を経るにつれて次第に対立を増していったと考えるべきであろう。

さて、『老子』とともにもう一つの主要な流れを形成したのは、黄帝書を中心とする流れである。黄帝書の流れを汲む『十六経』では、宇宙の主宰者たる上帝を最上位に据え、その意志を体现するものとしての天道を重視する。天道自体は『老子』の中でも重要な規範とされていたが、『十六経』ではとりわけ日月や四時に代表される天の周期運動に重きを置いており、この点が黄帝書系統の思想の大きな特色となっている。独特の宇宙生成論を備える『太一生水』は、万物の始元・根源を設定するという点では『老子』と似た思考を展開するものの、それを「道」とは呼んでいない。陰陽や四時等を含む一年のサイクルの誕生に主眼を置く点では、むしろ黄帝書系の思考と近似する。『太一生水』については非常にその位置づけが難しいが、四時等に代表される一年という周期の説明に重点が置かれていることよりすれば、やや黄帝書よりの思想であるといえる。

『十六経』では、天における日月や四時の周期運動から、刑徳の併用という規範を導き出すとともに、天時に合致した運用法を説く。そして天が示す時宜を逸した場合には、天殃が降るといふ、いわゆる天人相関思想が見えており、とりわけ問題とされているのは他国に対する軍事発動の時宜である。それは軍神的な性格を持つ黄帝のイメージとも相俟って、『十六経』の中心課題ともなっている。このような面から本書の思想を、一種の軍事思想とみることも可能であろう。

『十六経』に代表される黄帝書の思想を中心に多様な展開を見せるのが『鶡冠子』である。『鶡冠子』も天を周期運動体と考えており、日月や四時を中心とする天道から、刑徳と始めとする多くの規範を抽出する。『鶡冠子』中には、『経法』や『十六経』とほぼ一致ないしは類似する文章も数条見えており、黄帝書の思想的影響を強く受けていることを窺わせる。ただし『鶡冠子』では、黄帝書に見えるような天道思想を中心とした上で、新たな展開もみせている。天地の周期運動に則った上での郡県制の構想は、『鶡冠子』の中でも特筆すべき思想であろう。また、黄帝書では仁義等の人倫徳目に対してほとんど無関心だったのに対し、『鶡冠子』ではこれを天の四時に配置するという思考も見える。天の四時や地の五行に倣った軍隊の布陣を説くのも、黄帝書には見られなかった思考である。これらはいずれも天道を中心としており、黄帝書の思想の発展形とみることができよう。だが、『鶡冠子』には黄帝書とは大きく異なる部分も見える。『鶡冠子』では天殃に関する記



述は影を潜めており、天の強制力が黄帝書に比べてかなり弱まっている。『鶡冠子』中には、聖人こそが天地を統御していると述べる部分さえあり、逆に人為の可能性は飛躍的に高まっている。以上の点は『鶡冠子』独自の展開として注目されるであろう。

以上のように道家思想は、『老子』に連なる流れと黄帝書に連なる流れという二つの大きな流れを中心として展開していったと考えることができる。もっとも、『老子』系の思想と黄帝書系の思想との間には、天道を重視するなどの共通部分も少なからずあり、両者は複雑に絡み合いながら展開していったと考えねばならない。

古代において天道に関する専門的知識を有していたのは史官であり、これらの道家思想の思想的淵源も史官の天道思想にあると推測される。黄帝書は史官の天道思想をより徹底させる形で発展し、一方の『老子』は天道の背後に新たに「道」を創設するという形で展開する。このような違いはあるものの、同じく史官に端を発した両者は、以後それぞれに展開し、時には複雑に絡み合いながら、車の両輪として道家思想を形づくっていったのである。

## 論文審査結果の要旨

先秦道家の文献は『老子』と『莊子』を除いて大半が減んだため、道家思想の研究は、『老子』と『莊子』を中心に進められてきた。だがこうした研究方法では、『老子』と『莊子』の影響関係にのみ論点が集中し、それ以上の広がりを用意して道家思想の形成過程を解明するには、大きな限界が存在した。だが近年になって、長沙馬王堆帛書・郭店楚簡などの新出土資料が発見され、その中には多くの先秦道家の文献が含まれていた。この論文は、これらの資料を用いて道家思想の形成過程に再検討を加えることを目的とする。

第一章・第二章・第三章では、郭店楚簡『老子』に見られる原初的テキストでは仁・義・礼が否定されず、むしろ肯定されていること、竹簡本『文子』はそうした郭店楚簡『老子』をベースに学問論・修養論を強化して『老子』の欠を補完した著作であること、郭店楚簡『太一生水』と郭店楚簡『老子』が同系統の思想と見なされたため、『老子』の「道」と「太一」を同一視する見方が生じたことなどを指摘している。

第四章では、『莊子』内篇と『莊子』外・雑篇の思想的差異に検討を加え、外・雑篇を著作した莊周後学が、仁・義・礼を否定する反儒家的な『老子』のテキストを形成したことを指摘している。第五章・第六章では、馬王堆帛書『十六経』や『鶡冠子』に分析を加え、『老子』とも『莊子』とも異なる黄帝書系統の道家思想が形成されていく過程を論じている。第七章では『淮南子』に検討

を加え、さまざまな先秦の道家思想が前漢武帝期にどのように融合され、道家思想の最終的な姿が形成されていったかを論じている。

本論文は、新出土資料および新出土資料の発見によって偽書の疑いが晴れた文献を活用して、道家思想の形成過程に再検討を加え、儒家と親和的だった『老子』のテキストを莊周後学が反儒家的なテキストに改変し、それによって儒家と道家が対立する構図が作られたこと、これまで先行研究のなかった『鶡冠子』を分析して、それが漢楚抗争期を背景に成立したことを解明するなど、多くの新見を提示している。故に本論文は博士の学位論文として適当であり、福田一也氏は自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有すると認められる。よって本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。